

Title	センチニクバエ蛹の呼吸とDNA合成に対する放射線の 影響
Author(s)	佐藤,周子;粟冠,正利
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1967, 26(12), p. 1574- 1578
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

センチニクバエ蛹の呼吸と DNA 合成に

対する放射線の影響

東北大学医学部放射線基礎医学教室 佐藤周子粟紀正利 (昭和41年7月21日受付)

Radiation Effects on the Respiration and DNA Synthesis in the Pupa of Sarcophaga peregrina

by

Chikako Sato and Masatoshi Sakka

Dept. Radiation Research, Tohoku Univ. School of Med. Sendai, Japan

The pupae of Sarcophaga peregrina received x-irradiation at the final stage of prepupa and their oxygen consumption was measured by Warburg manometers throughout the pupal stage. Irradiation resulted in the inhibition of adult formation as well as the inhibition of the increase of oxygen uptake at the late pupal stage. Three patterns of radiation effects were found according to doses. 1) With small dose (below 4.6 kR) on the first day of puparium formation, oxygen uptake at 8 days of age decreased linearly with increasing dose. Pupae failed to emerge, but morphologically reached certain stages of development which were different according to the dose. The survival time, however, was about 11 days, the same as that in non-irradiated and non-fed pupae. 2) With medium doses (6.9 to 55 kR), the amount of respiration was maintained at an extremely low level throughout the pupal stage, but survived far longer than the non-irradiated control pupae. 3) With large doses (above 69 kR), oxygen uptake was exponentially reduced with time after the irradiation, leading the organism to death in the early pupal stage.

DNA of the whole organism was extracted with hot 5% perchrolic acid following Schneicer's method 3 hours after the injection of ³H-thymidine, and its radioactivity was measured by a liquid scintillation counter. Incorporation of label was reduced by irradiation. The response was different with dose as shown in Fig. 4.

Autoradiographs were made three hours after the injection of tritiated thymidine to know the radiation effects on DNA synthesis of various tissues. Synthesis of DNA in the cells of the central nervous system was most extensive at the puparium formation and decreased with age. Incorporation of label was also detected in the thoracic myoblasts, hypodermal histoblasts and leg myoblasts during 72 hours after the puparium formation. No trace of label were recognized in the muscle cells after the fusion of myoblasts.

The proportion of labeled cells was extensively reduced after the irradiation in brain cells, myoblasts and hypodermal histoblasts, but never in the cells of alimentary canal that have polytene chromosome. Therefore it was difficut to determineonly the single target organ most responsible for radiation injury from these autoradiographic studies.

— 34 —

目的

成虫組織の形成に伴う蛹期後半の呼吸量上昇¹⁾ ~40は放射線照射により抑えられる^{5)~7)}.この抑制 は成虫組織形成抑制と平行していると思われるの で個体発生に対する放射線の影響を酸素消費量測 定によつて定量化し,又,障害の原因となつてい る細胞をオートラジオグラフ法で検索することが 本実験の目的である.

材料と方法

センチニクバエ幼虫が囲蛹殻形成により運動を 停止した時を蛹の0時間令とし以後±1時間の正 確さで令をわけた.この材料の性質については文 献を参照されたい^{8)~11)}.呼吸量測定は蛹1匹ず つを容器に入れてワールブルグ検圧計で25°Cで行 った.24~26時間令に照射し,その後24時間ごと に酸素消費量を測定してすべての個体の呼吸量が ゼロになるまで追跡した.

DNA合成細胞の検索は、蛹の腹部に³H-TdR 0.5µCi/mm³を注射し3時間27°Cに放置したあと アルコールブアンで固定しパラフイン切片を作つ た、脱パラフイン後スライドグラスごと5%過塩 素酸に30分つけ、2%過塩素酸を2回通してDN Aにとりこまれていない³H-TdR を洗い流した. さくら液体乳剤 NR-MI をデイツピングし,14日 間露光後現像, ヘマトキシリン―エオジン染色を 行つた.核当りの銀粒子数が4個以上のものをと りこみ(+)とした.全個体のDNA合成率は、蛹 1匹当り³H-TdR 0.5µCi/mm³を腹部に注射し27 ℃で3時間とりこませた後,蛹10匹を1群として 組織をポツター型ホモジナイザーで磨砕し Schneider 法DNAでを抽出して求めた. DNA抽出液 1 cm³に Bray のシンチレーションカクテル10:m³ を加えて容器に入れ、ヌクレアシカゴ製液体シン チレーションカウンターで放射線を測定した.

照射は蛹を1層に並べ, 50 kVp, 5 mA (460 R/min)のX線で行つた. (ソフテックス社製) FSD=21cm.

成績

— **3**5 —

 呼吸に対する障害と線量
 非照射蛹および25±1時間令に照射を受けた蛹

Fig. 1 Respration curve following the irradiation. oxygen uptake was measured at 27°C. Cross bar represents one standard deviation. Seven to 28 pupae were used for each point. The increase of respiration at late pupal stage was inhibited by irradiation. The number in the parenthesis indicates the exposure (kR).

の呼吸量は、日令と共に図1のように推移した. 非照射蛹の酸素消費量は囲蛹殻形成直後には蛹1 コあたり28.3 μ lO₂/30min の高い値を示すが、の ち減少して4日令には 6.1 μ lO₂/30min と最も低 く、日令が進むにつれて再び上昇する.8日令後半 に羽化がおこるが、羽化運動中および羽化直後の 45分以内に酸素消費量は急上昇して 46.3 μ lO₂/30 min となり生存中はその値がつづく.12日令の死 んだ個体の酸素消費量はゼロである.照射に対す る反応は複雑であるが、ここでは25±1時間令に



Fig. 2 The relationship between the amount of oxygen uptake (at 25°C) and exposure. Pupae were irradiated at one day of age and their oxygen uptake was measured at eight days of age. The dose-effect curve is composed of three portions.

1575

照射をうけた蛹が 192±1時間令にいたつた時の 呼吸量を測定し,線量との関係を図2に示した. この時間は非照射蛹が羽化する約7時間前に相当 する.線量一効果曲線が異なる3部分から成るこ とから,線量範囲によつて3種類の障害にわける ことができる.

第1は 4.6 kR 以下の線量による障害である. この線量域の反応の照射日令によるちがいについ てはすでに報告した⁶⁾⁷⁾. 1.4 kR 照射された蛹 の約95%は羽化できないが,蛹期後半の呼吸量上 昇はおこり8日令の酸素消費量は同時刻の非照射 蛹の値の²/₈を示し,9日令に最高値に達した後減 少する.8日令呼吸量は線量が増すと線量に対し て指数的に減少し,成虫組織形成の抑制も大きく なる.線量と外部形態形成抑制の関係を表1にま とめた.

第2の型の障害は 4.6~27.6 kR 照射によつて おこる.この範囲の照射を受けた蛹の呼吸量は96 時間令の低い値を持続し蛹後半にいたつても呼吸 の上昇が全くみられない.この反応は 4.6~27.6 kR の線量範囲では等しく,線量一効果曲線上で プラトーを作る.

第3の型の障害は69 kR 以上の大線量照射での みおこる.呼吸量は図1に示すように照射後の時 間に対して指数的に減少をつづけて4~6日の間 にゼロになる.これは我々が溶解死または早期死 と呼んでいるもので,囲蛹殻の中で虫体が縮少し て4~6日の間に正常の¹/₈以下の体績になる.

2. 生存時間に対する放射線の影響

はじめ50匹から成る標本を照射し,照射後24時 間ごとに7又は14匹を任意に抽出して1匹づつ呼 吸量を測定し,酵素消費のないものを死んだ個体 として平均生存時間を計算しその値を図3に示し た.蛹期後半の呼吸上昇がおこる程度の小線量照 射(1.4~4.6 kR)をうけた蛹の呼吸は非照射 対照に等しく囲蛹殻形成後約11日で停止する.但 しこの場合対照の羽化後成虫には餌を与えずにお く,中線量(4.6~27.6 kR)をうけたため低い 呼吸量のままとどまり形態的にも成虫化の行われ ない蛹は,照射後16~30日間も呼吸を続ける.但 し1匹当りの呼吸量は図1にみるように低いまま





である.更に大線量(69kR以上)照射では4日 令から6日令の間に溶解死がおこる.2日令以後 の蛹に照射した場合には溶解死はおこらないが 230kR以上の巨大線量では生存時間が短かくな る.但し350kR以下では即死はおこらない。

3. DNA合成に対する放射線の影響

25~27時間令の蛹に1.38 kR 又は13.8 kR 照射 後いろいろな時間に蛹の腹部に³H-TdR 0.5 μCi を注射し, DNAにとりこまれた放射能を図4に 示した.非照射蛹では細胞数が増加するので蛹1 コ当りのDNA合成率が増加する.1.38 kR (小 線量)をうけた蛹では照射後5時間でDNA合成



Fig. 4 The rate of DNA-synthesis after irradiation. H-TdR (0.5 μ Ci per one pupa) was injected to the abdomen at various interval from the irradiation and DNA was extracted by Schneider's method after the incubation of three hours at 27°C.

— 36 —

昭和42年3月25日

率が1度低下するが14時間後には再び増加する. 1.38kR(中線量)照射後2時間のDNA合成率 は照射前と変らず,5時間から14時間までの合成 率は照射前の約¹/2の値になりその後更に一方的に 減少して30時間後にはゼロに近くなる.

4. DNA合成細胞の検索

非照射虹の各時期における標識係数を³H-TdR とりこみによるオートラジオグラフで測定し図5 に示した. 蛹の初期には組織芽細胞, 筋肉芽細胞 および神経細胞にとりこみが著明である. 大脳半 球および胸部神経筋におけるDNA合成細胞の割 合は囲蛹殻形成直後に最大だが時間と共に減少し 60時間令にはほとんどゼロである. 脚部筋芽細胞 の標識係数は24時間令(前蛹期)までは約40%だ が頭部膨出後の36時間令には65%に上昇する.72 時間令から再び減少するが筋芽細胞の融合が完了 している7日令でも11.9%を示していた.成虫の 飛翔筋を作るべき筋芽細胞は36時間令から幼虫の 3対の背部筋のまわりに集つて70~80%の細胞が ⁸H-TdR をとりこむが、幼虫筋肉の中に入りこん で融合をはじめた細胞には全くとりこみがみられ ない(写真),96時間令以後には筋芽細胞の融合が





— 37 —



Plate. Autoradiograph of the section of muscle tissue in 48 hours old pupae. Incorporation of label is found in only free myoblasts around the larval muscle and not in the myocyte after the fusion in the larval tissue. $0.5 \,\mu$ Ci Of ³H-TdR per one pupa, labeling time 3 hours, 14 days exposure.

が進んで標識係数が低下する.3日令以後にDN A合成を行う主なものは,消化管,成虫の脂肪体 細胞,外性器をつくる腹部成虫芽細胞等である. 昆虫の消化管上皮細胞は多糸染色体を持つことが 知られており,細胞分裂を伴わないDNA合成で あるかもしれない.

25~27又は48~50時間令の蛹に1.38, 2.3又は 13.8 kR 照射し, 19時間後に³H-TdR を注射して 標識係数と線量の関係を図6に示した.標識細胞 率の照射による減少は脳組織,組織芽細胞および 筋芽細胞では著明なのに対し,後腸および前胃の 腹部成虫芽細胞のとりこみは 2.5 kR 照射によつ ては全く減少しない. 1.38 kR 照射後の脳組織お よび下皮組織芽細胞には,壊死におちいつた細胞 の周囲に銀粒子を多数もつた標識細胞の集団がみ られたが, 13.8 kR 照射後にはそのような回復像 はみられなかつた.

考 察

蛹は幼虫組織の崩壊および時期を異にした各成 虫組織の形成が行われている¹²⁾複雑な系であり, 定量的取扱いは困難ではあるが,8日令の酸素消 費量が個体の発生程度と良く対応しているので, 放射線による発生抑制の程度と線量との関係を呼 吸量測定によつて定量化した.8日令呼吸量の線 1578



Fig. 6 The relation between the diminution of DNA-synthesizing cells and exposure. The brain cells, myoblasts and hypopermal histoblasts were radiation sensitive, whereas cells of alimentaly canal were resistant. Irradiated at 25 to 27 hours or 48 to 50 hours after puparium formation, injected with H-TdR 19 hours after the exposure, labeling time 3 hours.

量一効果曲線がはつきりと3部分から成り,線量 一生存時間曲線の3部分と線量の点で対応してい ることから3つの型の障害があることが示唆され た.照射後におこる成虫組織形成抑制は,組織学 的方法によれば2つの型にわけることができると いう報告がある¹³⁾¹⁴⁾.このちがいは測定方法のち がいからおこつたものであると考えられる.つま り形態学的には区別できない小,中線量照射によ る死亡に2つの反応型のあることが呼吸曲線に対 する影響から示された.

成虫組織を作るべき細胞は囲虹殻形成直後には いくつかの成虫芽として存在しており,その組織 芽細胞が主に 蛹期のはじめの3日間に増殖し, 後,成虫組織へ分化する.どの組織が放射線の影 響を強く受けるかを知る目的で⁸H-TdR 注射後の オートラジオグラフを作製し,照射によるDNA 合成細胞率の減少を調べたが,消化管上皮細胞の とりこみが影響を受けない他は,脳細胞,下皮組 織芽細胞および筋芽細胞のDNA合成はいずれも 強く障害を受けており,特定の標的臓器のみを考 えることはできなかつた.

謝辞 本研究の一部は文部省科学研究費の援助で行われた.と、に記して謝意を表す.

献

文

- Schneiderman, H.A. and C.M. Williams: Biol. Bull., 105 (1953), 320-334.
- 伊藤智夫:蚕糸試験場報告,14 (1954),263— 278.
- 小林勝利: 蚕糸試験場報告, 15 (1957), 181— 273.
- Agrell, I: Physiology of Insecta I p. 130— 133. 1964. Academic Press, New York and London.
- Henshaw, P.S. and A.B. Golomb: Radiology 34 (1940), 721-730.
- Sato, C: Tohoku J. exp. Med. 90 (1966), 1 --8.
- 7) 佐藤周子, 佐々木俊作, 栗冠正利: 日本医放 会誌, 26 (1966), 8号.
- 8) 栗冠正利:日本医放会誌,15 (1956),1099-1105.
- Sakka, M: Tohoku J. exp. Med. 86 (1965), 325–333.
- Sakka, M: Bull. Tokyo Med. Dent. Univ. 7 (1960), 231-235.
- 加納六郎:日本のハエ(衛生害虫叢書Ⅱ), D DT協会,東京(1954).
- Demerec, M: Biology of Drosophila, p. 283 -419. John Wley & Sons, Inc. New York. 1950.
- 13) Fritz-Niggli, H: Fortsch. Röntgenstr. 76 (1952), 218-254.
- 14) 佐々木俊作: 動物学雑誌, 75 (1966), 207-214.
- 15) Bowers, B. and C.M. Williams: J. Biol. Buli. 126 (1964), 205-219.